様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ５ 月 ３１ 日現在

機関番号：３４５１０
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2012～2015
課題番号：２４７３０５２５

研究課題名（和文）対人コミュニケーションの日本・中国間比較に関する実験研究

研究課題名（英文）What are the differences of interpersonal communication between Japanese and Chinese people?

研究代表者
木村　昌紀（KIMURA, Masanori）

神戸女学院大学・人間科学部・講師

研究者番号：３０４６７５００

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,500,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究の目的は、実験的なアプローチによって、日本人と中国人の対人コミュニケーションを比較することである。研究１では、協調的で、情緒志向的なコミュニケーション（おしゃべり）を比較した。研究２では、協調的で、課題志向的なコミュニケーション（話し合い）を比較した。研究３では、非協調的なコミュニケーション（対人葛藤）を比較した。一連の研究結果から、日本人と中国人の対人コミュニケーションの共通点と相違点、さらに、日本人が非協調的なコミュニケーションを苦手とする可能性が示唆された。

研究成果の概要（英文）：In this experimental study, we examined the differences of interpersonal communication between Japanese and Chinese people. Study 1 focused on cooperative and emotion-oriented communication (i.e. chatting) , while study 2 took notice of cooperative and task-oriented communication (i.e. collaborative discussion). In study 3, we compared non-coordinate communication (i.e. conflict) between Japanese and Chinese. These results suggested that Japanese and Chinese have similarities and differences in interpersonal communication. Additionally, Japanese might have trouble with non-cooperative communication.

研究分野：社会心理学

キーワード：対人コミュニケーション　文化比較　日本　中国

１．研究開始当初の背景

近年，日本人と中国人の異文化コミュニケーション機会が急激に増加している。日本政府観光局（2011）の統計では，前年度中国から日本への入国者数は台湾や香港を含めると諸外国中最多で，日本から中国への訪問者数も諸外国中最も多い。その日本人と中国人の間でコミュニケーション・トラブルが問題となっている。在中日本企業社員と現地中国人従業員の間（e.g., 西田, 2006, 2007）や，在日中国人留学生と日本人学生・教員の間（毛, 2010; 岡・深田, 1995），日常生活での一般的状況（e.g., 園田, 2001）など様々な場面で，両者のコミュニケーション・トラブルが報告されている。しかし，近年の研究は，日本人と中国人の異文化コミュニケーションの難しさを繰り返し報告するものの，日中両者の複合的な影響から，トラブルの原因が特定できていない。この問題を解明するためには，そもそも日本人と中国人がどのように対人コミュニケーションするかを明らかにする必要がある。両者の対人コミュニケーションを比較し，共通点と相違点を整理すれば，原因特定が可能になる。

従来の研究は，欧米と東アジアを対比する構図で知見を蓄積し，異文化コミュニケーション理論を構築・展開していた（Hall, 1976; Markus & Kitayama, 1991; Ting-Toomey, 2005; Triandis, 1995）。具体的には，重視するのが個人か集団か，コミュニケーションが直接的か間接的かといった観点から，異文化コミュニケーションが説明されてきた。それらの理論は，日本と中国を同じ東アジア文化圏として扱うため，両者のコミュニケーション・トラブルを説明することが難しい。近年の研究は，心理特性（e.g., Yamaguchi et al., 2007）や対人関係（e.g., 毛・大坊, 2008）の日中差を報告しているため，東アジア文化圏としての両者の共通点だけではなく，相違点にも注意しなければならないだろう。日本人と中国人の異文化コミュニケーションを説明するためには，両者の共通点と相違点を整理し，それらを踏まえて，従来の異文化コミュニケーション理論を拡張していく必要がある。

２．研究の目的

本研究では，日本人と中国人それぞれを対象に会話実験を体系的に実施して，動機・行動・認知の観点から比較することで，両者の対人コミュニケーションの共通点と相違点を検討する。

実験状況として「会話者間の関係性」（友人関係・未知関係）と「話題の種類」（協調的話題－非協調的話題，情緒志向的話題－課題解決志向的話題）を操作した会話実験を順番に実施していく。具体的な話題条件は，協調的で情緒志向的な「親密話題」（研究 1），協調的で課題解決志向的な「討論話題」（研究 2），非協調的な「葛藤話題」（研究 3）を設ける。また，動機・行動・認知的側面を測定することで，対人コミュニケーション戦略の特徴を包括的に調べる。

３．研究の方法

研究 1

実験参加者　日本人は関西の大学で募集し，未知関係（平均年齢 19.20 歳，標準偏差 0.99 歳）と友人関係（平均年齢 20.10 歳，標準偏差 1.13 歳）各 20 組 40 名の女性が参加した。中国人は，遼寧省の大学で未知関係（平均年齢 20.50 歳，標準偏差 0.72 歳）と友人関係（平均年齢 19.05 歳，標準偏差 0.78 歳）各 20 組 40 名の女性が参加した。

手続き　会話は，キャンパス・ライフについて 3 分間自由に話してもらい，様子を VTR で撮影した。会話終了後に質問に回答を求めた。また，ストップ・ディスタンス法で対人距離を測定した。最後にディブリーフィングを行い，終了した。

質問項目（1）自己呈示動機（谷口・大坊, 2005; 「外見的魅力」3 項目（e.g.,“外見的に魅力的である”），「有能さ」4 項目（e.g., “能力がある”），「社会的望ましさ」3 項目（e.g., “道徳的である”），「個人的親しみやすさ」3 項目（e.g.,“好感の持てる”）；7 件法）。（2）コミュニケーション評価（木村・大坊・余語, 2010; e.g., “協力的に会話が進んだ”; 18 項目 8 件法; 得点が高いほど，コミュニケーションをポジティブに評価している）。中国語版は中国人 2 名（日本に 8 年以上滞在する大学教員・院生）が協議して翻訳した。

行動特徴の抽出　会話の音声映像を見ながら，訓練を受けたコーダーが sigsaji（荒川・鈴木, 2004）を用いて，笑顔・発話・うなずき・視線の生起時間を定量化した（時間的分解能は 0.5 秒）。一致率を確認し，指標ごとに平均値を算出して分析に用いた。

研究 2

実験参加者　研究 1 と同様であった。

手続き　社会的問題（e.g., 少年犯罪は親の養育態度に起因するか）から関心あるテーマを選んで，3 分間討議して結論を出すよう求

めた。その様子を VTR で撮影した。会話終了後，質問項目に回答してもらった。また対人距離をストップ・ディスタンス法で測定した。ディブリーフィングを行い，実験を終了した。

質問項目・行動特徴の抽出　研究 1 と同様。

研究 3

実験参加者　日本人は，関西で未知関係 20 組 40 名（平均年齢 19.85 歳，標準偏差 0.75 歳）と友人関係 23 組 46 名（平均年齢 19.63 歳，標準偏差 0.62 歳）の女性が参加した。中国人は，遼寧省で未知関係（平均年齢 19.13 歳，標準偏差 0.46 歳）と友人関係（平均年齢 19.65 歳，標準偏差 0.80 歳）各 20 組 40 名の女性が参加した。

手続き　実験参加の動機づけを高めるため，謝礼は基本 1000 円（中国では 50 人民元），課題の出来でさらに 500 円（30 人民元）渡すと教示した。実際には，実験後に全員に 1500 円（80 人民元）支払った。模擬的な葛藤状況をつくりだすため，「行動的役割演技法」（福島・大渕・小嶋，2006）を用いた。これは，実験参加者に架空の葛藤状況で登場人物として役割を演じてもらうが，どのようにコミュニケーションを行うかは任意の課題である。具体的には，2 人は実習授業の同じ班で，共同レポート課題の提出締め切り直前に，課題作成の代理を依頼する役割と，その依頼を断る役割の設定であった。その会話の様子を VTR で撮影した。3 分間の会話終了後，質問項目に回答してもらった。最後にディブリーフィングを行い，実験を終了した。

質問項目　(1) 対人葛藤の認知（村山，2009;「課題葛藤」4 項目「関係葛藤」5 項目 7 件法）(2) 一般感情（小川・門地・菊谷・鈴木，2000;「ポジティブ感情」「ネガティブ感情」「安静状態」各 8 項目 4 件法）(3) 葛藤対処行動（村山・三浦，2014;「譲歩」「妥協」「主張」「統合」「回避」各 2 項目 7 件法）(4) 対人コミュニケーション認知（木村・大坊・余語，2010; 18 項目 8 件法; 1 因子で，得点が高いほどコミュニケーションをポジティブに認知）。中国語版の質問項目は，中国人の大学教員（日本滞在経験 14 年以上）2 名（1 名は研究者）が協議して翻訳した。

４．研究成果

研究 1

動機の日中比較　自己呈示動機を従属変数，国（日本・中国）と関係性（未知・友人）を独立変数にした分散分析を行った（図 1-1）。外見的魅力は国（日本＞中国）の主効果のみ有意だった。有能さは主効果・交互作用すべて非有意だった。社会的望ましさは，国（日本＞中国）と関係性（未知＜友人）の主効果が有意だった。個人的親しみやすさは交互作用が有意となり，下位検定を行った（日本 未知＜友人，友人 日本＞中国）。ここから，どちらの関係でも日本人は中国人に比べて外見的魅力と社会的望ましさの動機が高いこと，友人関係で日本人はさらに親しみやすさの動機も高いこと，両国ともに未知よりも友人で社会的望ましさの動機が高いことが示された。また，動機の種類と関係性を独立変数にした分散分析を行った。日本人は，他の動機に比べて親しみやすさの動機が高く，中国人は親しみやすさ＞社会的望ましさ≒有能さ＞外見的魅力の順に動機が高かった。

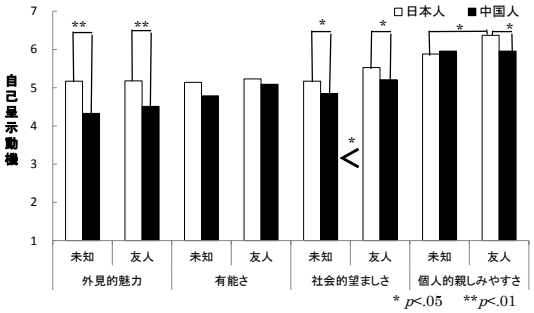

図 1-1　親密なコミュニケーション動機の日中比較

行動の日中比較　各コミュニケーション行動を従属変数，国と関係性を独立変数にした分散分析を行った（図 1-2）。笑顔は国（日本＞中国）の主効果が有意だった。発話は，主効果・交互作用すべて非有意だった。うなずきは，国（日本＞中国）と関係性（未知＞友人）の主効果が有意だった。視線は，国（日本＜中国）と関係性（未知＞友人）の主効果が有意だった。対人距離は国（日本＞中国）と関係性（未知＞友人）の主効果が有意だった（図 1-3）。ここから，日本人は笑顔とうなずきが多く，中国人は視線が多く対人距離が小さいこと，両者ともに友人より未知の方がうなずきや視線が多く，対人距離も大きいことが示された。

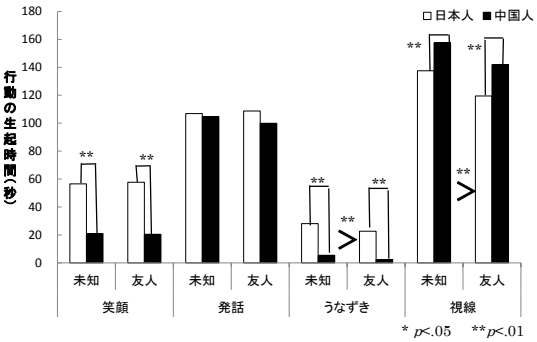

図 1-2　親密なコミュニケーション行動の日中比較

評価の日中比較　コミュニケーション評価を従属変数，国と関係性を独立変数にした分散分析を行った（図 1-4）。交互作用が

有意で，未知関係では日本人より中国人の評価がポジティブであったが，友人関係では両国間に違いはみられなかった。

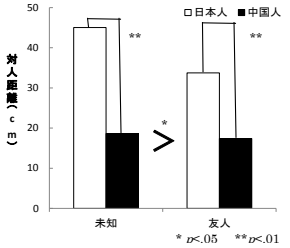

図 1-3　対人距離の日中比較

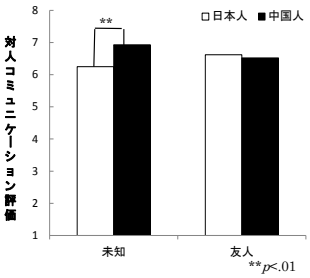

図 1-4 評価の比較

研究 2

動機の日中比較　自己呈示動機を従属変数，国（日本・中国）と関係性（未知・友人）を独立変数にした 2 要因分散分析を行った（図 2-1）。外見的魅力や社会的望ましさ，個人的親しみやすさは国（日本＞中国）の主効果のみ有意だった。有能さは，主効果・交互作用すべて非有意だった。ここから，どちらの関係でも日本人は中国人に比べて，外見的魅力と社会的望ましさ，親しみやすさの動機が高いことが示された。また，動機の種類と関係性を独立変数にした 2 要因分散分析を行った。動機の種類の主効果が有意で，日本人・中国人とも，親しみやすさ＞社会的望ましさ≒有能さ＞外見的魅力の順に動機が高かった。

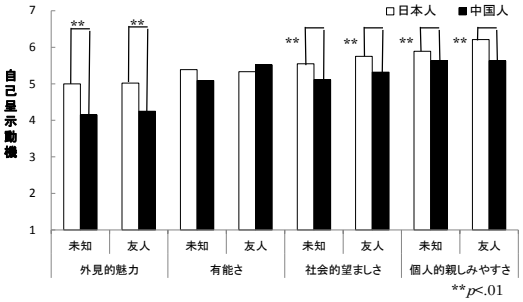

図 2-1　討議中の自己呈示動機の日中比較

行動の日中比較　コミュニケーション行動を従属変数，国と関係性を独立変数にした 2 要因分散分析を行った（図 2-2）。笑顔は，国と関係性の交互作用が有意となり，下位検定を行った（日本人 未知＞友人，未知・友人 日本人＞中国人）。発話は主効果・交互作用すべて非有意だった。うなずきは国（日本＞中国）の主効果のみ有意だった。視線は，国（日本＜中国）の主効果のみ有意だった。対人距離は，国（日本＞中国）と関係性（未知＞友人）の主効果が有意だった（図 2-3）。ここから，日本人は笑顔とうなずきが多く，中国人は視線が多く対人距離が小さいこと，両者とも友人関係より未知関係の方が対人距離の大きいこと，日本人は友人関係より未知関係の方が笑顔の多いことが示された。

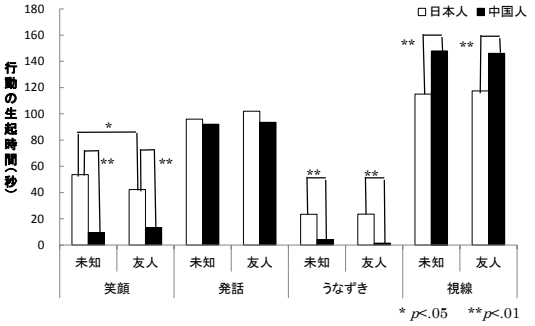

図 2-2　討議中のコミュニケーション行動の日中比較

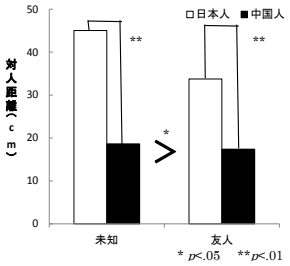

図 2-3 対人距離の日中比較

評価の日中比較　コミュニケーションの評価を従属変数に，国と関係性を独立変数にした 2 要因分散分析を行った（図 2-4）。主効果や交互作用は非有意だった。これらの結果から，国や関係性にかかわらず，討議の評価には違いがみられなかった。

研究１と２のまとめ　従来の研究は，欧米と対比するかたちで東アジアの日本人と中国人の共通点をクローズアップしていた。本研究でも，両国とも，親しみやすさの動機が最も高く，社会的望ましさの動機が続き，他者との調和を目指す集団主義的な志向性（e.g., Markus & Kitayama, 1991）があらわれていた。加えて，両国とも，友人より未知の相手には対人距離をとり，慎重に接していた。そして，討議の評価も日中で違いはみられなかった。

他方，日本人と中国人の討議を阻害しうる相違点もあった。先行研究（Bond, 1986, 2010）は，中国人の有能さ（面子）や社会的望ましさ（臉）を呈示する傾向を指摘したが，本研究では日本人の方が討議で外見的魅力，社会的望ましさ，親しみやすさの自己呈示動機が高かった。これは日本人の笑

顔やうなずきの多さと整合する。ただし，中国人は視線が多く，距離が近いため，表現方法が異なる可能性がある。討議の評価ではなく自己呈示動機を反映した日本人の笑顔やうなずきを見つめる中国人は，素直な好意や同意のあらわれと感じ，討議に誤解が生じる恐れがある。また，中国人に見つめ続けられた日本人には，重圧から緊張感や不快感が喚起されるかもしれない。

研究 3

対人葛藤　課題・関係葛藤間の相関は日本人で r=.44 (p<.01)，中国人で r=.59(p<.01)だった。各葛藤を従属変数，国（日本・中国）と関係性（未知・友人）を独立変数にした 2 要因分散分析を行った（図 3-1）。課題葛藤は主効果・交互作用ともに有意でなかった。関係葛藤は，国の主効果のみ有意であった（日本＞中国）。

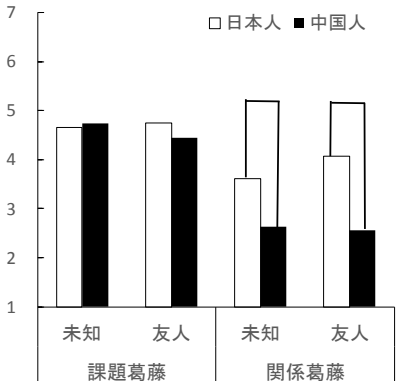

図 3-1 課題葛藤と関係葛藤の日中比較

葛藤中の感情　ポジティブ・ネガティブ感情・安静状態を従属変数，国と関係性を独立変数にした 2 要因分散分析を行った（図 3-2）。いずれも国の主効果が有意であり，ポジティブ感情と安静状態は中国が，ネガティブ感情は日本の方が高かった。

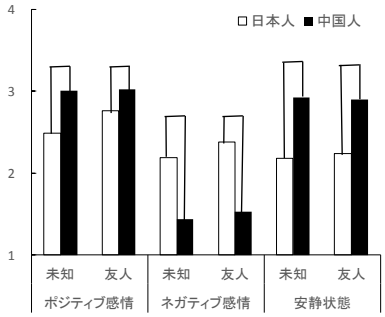

図 3-2　葛藤中の感情状態の日中比較

葛藤対処行動　譲歩・妥協・主張・統合・回避を従属変数，国と関係性を独立変数にした 2 要因分散分析を行った（図 3-3）。譲歩以外の対処行動で，国の主効果がみられた（日本＜中国）。

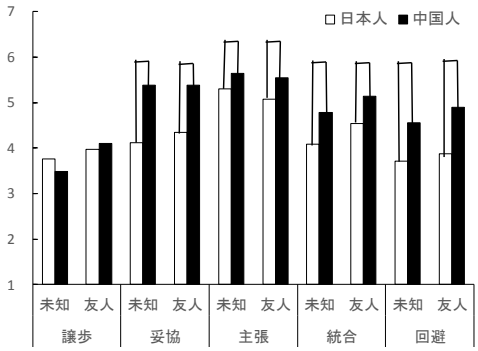

図 3-3. 葛藤対処行動の日中比較

対人コミュニケーション認知　対人コミュニケーション認知を従属変数，国と関係性を独立変数にした分散分析を行った（図 3-4）。その結果，国の主効果のみ有意であった（日本＜中国）。

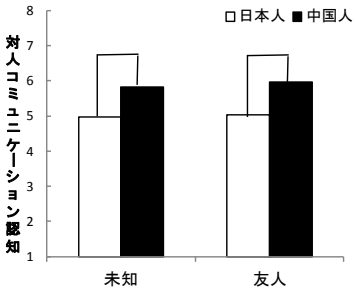

図 3-4 コミュニケーション認知の日中比較

まとめ　非協調的な葛藤状況のコミュニケーションで，課題葛藤は日本人と中国人で違いがみられない一方，関係葛藤は日本人より中国人の方が感じにくかった。それと関連して，葛藤中の感情状態は日本人の方がポジティブでなく，落ち着かず，ネガティブであった。葛藤対処に関して，譲歩以外の多岐にわたる対処行動すべてが中国人は積極的で，日本人は消極的だった。この帰結として，日本人よりも中国人の方が葛藤状況のコミュニケーションをポジティブに認知していたと推察される。

これまでの知見から，おしゃべりや話し合いなどの協調的なコミュニケーションでは，自己呈示動機や言語・非言語行動の表出パターンは異なるものの，日本人と中国人でコミュニケーション認知に違いはみられなかった（木村・毛, 2013, 2015）。総合的に考えると，日本人は協調的なコミュニケーションをそれほど不得手としないが，非協調的なコミュニケーションについては中国人に比べて苦手とすることが示唆された。

もし両者の間に葛藤が生じれば，中国人は「日本人は積極的に葛藤に対処せず誠

実でない」と認識し，日本人は「中国人は触れたくない問題を追求して失礼だ」と認識するおそれがある。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）
〔雑誌論文〕（計　2　件）
① 木村昌紀 (2015).　対人コミュニケーションの観察に基づく親密性の推論 心理学研究, 86, 91-101. （査読・有）
② 木村昌紀・磯 友輝子・大坊郁夫 (2012). 関係に対する展望が対人コミュニケーションに及ぼす影響 －関係継続の予期と関係継続の意思の観点から－実験社会心理学研究, 51, 69-78. （査読・有）
〔学会発表〕（計　10　件）
① 木村昌紀・毛 新華　(2015).　初対面で愛想のいい遠回しな日本人，親密な友人と本音で議論する中国人―協調的な討論状況における言語コミュニケーションの日本・中国間比較―　日本社会心理学会第 56 回大会発表論文集, p.177.　於: 東京女子大学（東京都・杉並区）（10/31/2015).
② Masanori Kimura & Xinhua Mao (2015). What are the differences of discussion between Japanese and Chinese people? *The 11th Biennial Conference of Asian Association of Social Psychology*, Cebu City, Philippines. (8/20/2015)
③ Masanori Kimura & Xinhua Mao (2015). What are the differences of interpersonal communication between Japanese and Chinese people ?: Experimental study with strangers and friends. *The 16th annual convention of society for Personality and Social Psychology*, Long Beach, CA, USA. (2/28/2015)
④ 木村昌紀・毛 新華 (2013). 日本人と中国人の討議的コミュニケーションは何が違うのか？―未知関係と友人関係を対象にした実験的検討― 日本心理学会第 77 回大会発表論文集, p.145. 於: 札幌コンベンション・センター(北海道・札幌市) (9/20/2013).
⑤ Masanori Kimura & Xinhua Mao (2013). What are the differences of interpersonal communication with strangers between Japanese and Chinese people? *The 10th Biennial Conference of Asian Association of Social Psychology*, Yogyakarta, Indonesia. (8/23/2013).
⑥ Masanori Kimura & Xinhua Mao (2013). What are the differences of interpersonal communication with friends between Japanese and Chinese people? *The 13th European Congress of Psychology*, Stockholm, Sweden. (7/10/2013).
⑦ 木村昌紀・毛 新華 (2013). 日本人と中国人の親密なコミュニケーションは何が違うのか？―未知関係と友人関係を対象にした検討― 日本感情心理学会第 21 回大会, 於: 東北大学（宮城県・仙台市）(5/11/2013).
⑧ 木村昌紀・毛 新華 (2012). 初対面のコミュニケーションに関する日本・中国間比較研究. 日本社会心理学会第 53 回大会発表論文集, p.103. 於: 筑波大学（茨城県・つくば市）(11/18/2012).
⑨ 毛 新華・木村昌紀 (2012). 日本人大学生に実施した中国文化要素が配慮された SST プログラムの持続効果. 日本心理学会第 76 回大会発表論文集, p.201. 於: 専修大学（神奈川県・川崎市）. (9/12/2012).
⑩ Masanori Kimura & Xinhua Mao (2011). How do Chinese people communicate with each other ? ：An experimental study focused on dyadic interaction by female friends . *Asian Association of Social Psychology 9th Biennial Conference, Kunming, China.* (7/30/2011).

〔図書〕（計　2　件）
① 大坊郁夫（監修） 谷口淳一・金政祐司・木村昌紀・石盛真徳 （編）(2016).　対人社会心理学の研究レシピ ―実験実習の基礎から研究作法まで― 北大路書房 （木村昌紀担当: 編集, 第Ⅲ部 Preview 対人コミュニケーションの研究 p.126-130, 第 10 章 対人コミュニケーション・チャネルの理解 p.131-143)
② Patterson, M. L. (2011). *More than words: The power of nonverbal communication.* Barcelona: Editorial Aresta. 大坊郁夫（監訳） (2013). ことばにできない想いを伝える －非言語コミュニケーションの心理学－ 誠信書房. （木村昌紀 担当章: 第 3 章 非言語コミュニケーションの構成要素とパターン p.28-50, 第 4 章 基本的決定因 p.51-75, 第 5 章 情報の提供 p.76-95, 第 10 章 システムズ・アプローチ p.184-202）

〔その他〕
ホームページ等　http://m-kimura.net/

６．研究組織
(1)研究代表者
木村昌紀（ KIMURA, Masanori ）
神戸女学院大学・人間科学部・講師
研究者番号： 30467500